

金沢文庫

金思燁

sa-yeup kim

右第二章

此章托物為喻以詠
王業積累之源遠也

周國大王이 幽谷애사루사帝業을 이루시니

우리 始祖 慶興에 사르사 王業을 이루시니

慶源古孔州或稱匡州父為胡人所據高麗宗時
大將尹璫逐胡人置鎮為防禦使本朝太祖七

年以有陵祿陞為慶源都護府別號墩城今分其
地為慶興都護府屬咸吉道慶興縣今所轄而實後

凡書諸道及州府郡
縣之名亦多類此

昔周大王이 幽斯依于 幽斯 後肇造丕基

依安也肇
音兆始也

丕大也書曰至于
大王肇基王迹

今我 始祖慶興是宅慶興是宅肇開鴻業

宅告也
鴻道作

朝鮮文學史

the history of korean literature

著者紹介

金^{キム} 思^サ 燁^ヤ

一九一五年二月、韓国慶尚北道漆谷郡仁同面で生る。京城大学法文学部文学科卒業(朝鮮語・文学専攻)。同大学大学院で小倉進平博士の指導のもとで上代歌謡研究・米國ハーバード大学燕京学館で朝鮮語と蒙古語の比較に取組む。文学博士。ソウル大学予科・東国大学・慶北大学の教授、慶北大学校大学院院長歴任。一九六〇年十月来日、大阪外国語大学客員教授・京都大学文学部講師として就任、現在に至る。

著書「俗談大辞典」(朝鮮日報出版部)・「鄭松江研究」(啓蒙社)・「朝鮮文学史」(正音社)・「李朝時代の歌謡研究」(学園社)・「松江歌辞校註」(文豪社)・「春香伝校註」(学園社)・「朝鮮のころ」(講談社新書)

現在「上代の朝鮮語と日本語」の親族関係を探るべく一連の作業に従事している。

現住所 大阪市住吉区万代西一丁目四六

朝鮮文学史

昭和四十八年四月十五日 印刷
昭和四十八年五月二十五日 発行

定価 二、八〇〇円

著者 金^{キム} 思^サ 燁^ヤ

発行者 金沢陽之介

印刷者 島田耕三

発行者 株式会社 金沢文庫

〒一〇一東京都千代田区墨河台三十三
電話 東京(二九五)〇二四一・二
振替口座 一七九八二〇

落丁・乱丁本はお取替えします。

©一九七三

はしがき

日本における朝鮮学は、活発とまではゆかなくとも、その歴史は古く且つ多岐に亘っている。だが文学関係、なかならず文学概論・文学史などの学的著作は皆無に近い状態である。戦前戦後、現代文学の作品中少数が翻訳されて紹介されたことはあったが、文学全体を概観するが如き述作はなかった。この原因として考えられることは、日本人のこの方面に対する無関心によるか、或は興味をもつ人士はあったにしても、これを鑑賞するには、朝鮮語の古典及び現代文をまず勉強しなければならぬ大儀な難題が先行したのに辟易したかも知れない。最近になって、この現象は変って、具眼の士が文学面にも興味をおぼえ、個人或はグループ的に研究を始め、この方面の論文や同人誌も現われたのは、まことに喜ばしいことである。

喜ばしいことだとあえて言えるのは、従来の朝鮮学がほとんど朝鮮史に重きをおいた感があり、日本人の朝鮮観もこれがその支柱となつてゐる。国家政治の変移のみを追究し、その表面現象の穿鑿を基礎にした朝鮮観は偏向性をまぬがれ難い。この民族の内面的動向、即ち精神面の追究、朝鮮人の内面生活、喜怒哀楽、理想、憧憬、夢などの多感な感情の動きを併せて洞察することなしには、正しい朝鮮観の把握は出来ない。無関心や不勉強のため、何時までも偏頗性を是正せずに放置することは許されない。最近朝鮮文学への関心の高まりと探求熱が漸く芽生えだしたのは、かかる意味で喜ばしいことだと言へるのである。

私は招かれて日本に来て、大学で朝鮮文学の作品や文学史を講じ始めて十年になるが、文学史は限定された時間内で一年間講義する分量は、四分の一にも満たず、終講になった時点で、いつも隔靴搔痒の感に堪えない。一冊の本に仕上げ、これを参考書にしながら、要所要所を講壇で深く掘りさげたかった。又在日僑胞の中にも母国の文学が知り

たいが、母国語が読めぬままに、日本文のこの方面の書物もなく、とまどっている人々の声も多く聞いている。かかる要望に答うべく拙著を書いた次第である。執筆に当って、特に次の点に留意した。

1 文学史の体裁からすれば多少はずれると思ひながらも、朝鮮文学になじまない読者の便を計って、概説編を設けて、全体の史的流れを概説した。

2 各時代毎に、その時代の文化史全般をも必要以上に紙面を費して言及し、文学史の流れを汲み取る手がかりとした。

3 一つの民族の文学はその民族固有の言語・文字で書かれた作品が主体であるが、朝鮮の場合、過去長い間、漢字・漢文が主的役割を果し、朝鮮語的表現は常に従属的位置におかれていた特殊事情に鑑み、朝鮮文学としては、あくまでも朝鮮語に依る作品を主軸にしながらも、漢文学の趣移をも除外しなかった。

4 文中に数多く引用される作品の日本語訳は、直訳を主にしている。従って結果的には訳文だけをもって見た場合、はなはだ稚拙な日本文になっている。これは日本語による私の属文能力の不十分のせいであるが、将来日本の学者による格調高いすぐれた訳文の出現を期待してやまない。

終りに拙著の出版に際して出版に尽力して下さった渡部学兄にあつく御礼を申し述べる。

一九七三年 初春

金 思 燁

目

次

はしがき

第一部 概 説

一 朝鮮文学の限界	3
二 朝鮮文学の特異性	14
1 形式上の特色	14
a 朝鮮語の発達とその特質	
b 表現文字の変遷	
c 文学の形態	
d 文体の種別	
2 内容上の特色	34
a 道文一致思想	
b 逃避思想と享楽主義	
c 諧謔性と楽天性	

各時代文学史

上古文学	77
------	----

一 部族国家の形成	77
1 概 観	77
2 各部族国家の習俗	80
3 漢文化の東漸	81
二 綜合体芸術	82
1 文学の発芽	82

2	説話の発生	85
---	-------	----

三国及び統一新羅の文学	89
-------------	----

一 文学の分立	89
---------	----

1 各国の文化活動	89
-----------	----

a 高句麗の文化	
b 百済の文化	
c 新羅の文化	
d 統一期の文化	

2 漢文学の発達	96
----------	----

3 雑戯劇と説話文学	102
------------	-----

a 雑劇の発生	
b 説話の発達	

二 新羅の郷歌文学	112
-----------	-----

1 羅代歌謡の概観	112
-----------	-----

2 郷歌文学の成立	117
-----------	-----

a 郷歌とその文献・研究概要	
b 郷歌の発生と作家	
c 郷歌の形式と内容	

3 散佚の歌謡	149
---------	-----

三 高句麗の文学	153
----------	-----

1 文献の湮滅	153
---------	-----

2 黄鳥歌と散佚の歌謡	154
-------------	-----

四 百済の文学	156
---------	-----

1 井邑詞	156
-------	-----

2 散佚の歌謡	159
---------	-----

高麗文学	161
------	-----

一 高麗文学の思想的背景 161

1 時代概観 161

2 仏教の消長 163

3 儒教と科挙・教育制度 168

a 儒教の動向 b 教育機関の設置 c 科挙の実施

4 漢文学の趨勢 171

a 四六体から古文体へ b 金富弼とその兄弟 c 李奎報の文学 d 李仁老と林椿

e 親元時代の漢文学

5 高麗の音楽 185

二 説話文学と雑劇の発達 186

1 説話文学の定着 186

2 八関会と雑伎戯、処容戯・山台劇 190

三 高麗歌謠 195

1 概観 195

2 均如大師と普賢十種願王歌 202

a 均如伝の板本 b 均如大師の略歴 c 普賢十種願王歌 d 普賢十種願王歌の形式と内容

3 現存の麗謠 210

a 時用郷楽譜・楽学軌範・楽章歌詞 b 麗謠の内容

4 麗謠の形式と文学性 236

a 形式上の諸問題 b 文学上の特長

5 時調体の発生 243

6 漢文記写・漢詩訳の歌 248

李朝文学

7	a 漢文記写による歌	b 小楽府と其他の訳詩・民謡	262
	散佚の歌		

一 ハングル(韓字)制定と草創期の文学

ハングル(杵杵)	制定と草創期の文学	265
1	時代概観	265
2	ハングルの創製と翻訳事業	275
3	漢文学の趨勢	283
4	頌禱歌と仏讃歌	287
	a 国初楽歌の概観	
	b 頌禱歌の特色	
	c 仏讃歌	
	d 鶴蓮花台処容舞合設	
5	竜飛御天歌	299
6	月印千江之曲と訳譜詳節	307
7	歌辞の先駆―不憂軒歌曲	311
	a 歌辞体の発生	
	b 丁不憂軒の歌曲	
8	国初の時調	316
9	小説の萌芽	319
	a 国初の稗官小説	
	b 金鰲新話と金時習	
勃興期の文学		326
1	時代概観	326
2	漢文学の趨勢	327
3	道学者の歌謡文学	329
	a 歌壇の新しい動向	
	b 景幾体の残片	
	c 聾岩の漁父詞	

三

4	鄭松江とその文学——松江歌辞……………	337
	a 松江の生涯と人品 b 作品と板本 c 松江歌辞の価値論	
5	内房歌辞……………	350
6	時調の発展……………	356
	a 道学者の時調 b 純粹派の時調 c 妓女の時調	
戦乱期の文学……………	363	
1	時代概観……………	363
2	漢文学の盛況と学風の変革……………	366
	a 漢詩文の新傾向 b 新学風の抬頭	
3	時調の隆盛……………	373
	a 兩乱と時調 b 尹孤山の時調	
4	小説の多様化……………	384
	a 軍談小説の影響と新作品 b 金万重の文学観と作品 c 宮廷小説	
5	朴蘆溪の文学……………	404

四

英正時代の文学……………	411	
1	時代概観……………	411
2	漢文新体の発展……………	414
	a 正祖の文体反正 b 朴燕岩と四家 c 委巷文学の推移	
3	歌壇の動向……………	420
	a 歌辞体の変移 b 時調の庶民化と変形の発生 c 老歌斎の歌人と歌集編纂	
4	小説の大衆化……………	426
	a 中国小説の翻案と翻訳 b 漢文体小説 c 燕岩の諷刺小説 d 大衆小説の氾濫	

文学年表
索引

5	春香伝……………	434
	a 春香伝の梗概	
	b 春香伝に現われた思想	
	c 文学的位置	
	d 唱劇化と異本	
五	国末の文学……………	440
1	時代概観……………	440
2	漢文学の衰退……………	441
3	唱劇の発達と広大……………	443
4	歌壇の動向……………	446
	a 時調の歌集と漢訳	
	b 掉尾を飾る歌辞	
5	俗謡（雑歌）と民謡……………	449
6	旧小説の衰残……………	452

第一部
概
説

一 朝鮮文学の限界

ダンテ又はゲーテの文学が、彼らの国民の精神生活を背景とした、一個性の表現であると同時に、次の時代の精神生活を構成していった力でもあったのと同じ意味で、国民文学を、その国民文化の自らの表現であり、それは又、次代の文化の創造に貢献している精神力でもあるという意味に解するならば、その観念は、同一の国土、言語、社会制度のなかに生活を営む民族が、特色ある発展をしながら、その内面的生活の自叙伝である文学を、自らの心情及び言語のなから産出し発展させることを意識し、又同時にこのような文学を他の国民の文学の個々の作品とではなく、統一された全体と比較して、自他の特質を発見するときに成立するものである。

しかるに、このような観念はギリシヤ人やローマ人においては存在しなかった。それは、ギリシヤ人の場合、比較すべき文学を所有しなかったし、ローマ人もただ、ギリシヤから移植してきた貴族文学を有していただけで、彼らの生活から自然発生したものではなかったからである。中世に至って、キリスト教が欧州の精神界を支配統一したが故に、国民文学の存在が可能となった。国民文学は、十七世紀に至り、フランス又はドイツ文学者達が、自国の文学の伝統に重きをおくようになってから、始めて抬頭してきたのである。

ヘルダーは、「言語、宗教、法律、文芸などは民族の特質と境遇の必然的な結果であり、団体生活の自然的な生産であって、その国の文学の全体は、その国の文化を反映する、国民の生きた力の体系 (Ein System lebendiger Kraft) の表現であり、詩人とは、周囲の多くの人の感じているものを、一層深刻に感知し、より完全な形象を見せてくれる者であって、かかる意味において、文学は個人の生産ではなく、従って私有すべきものではない」と述べている。文

学に対するこのような態度は、さらにゲーテ、シラー以後の文学者を通じて、国民的文学の觀念をますます明白なものにして来た。

しかれば、振りかえって朝鮮の文学を規定しようとするに、現在、朝鮮半島、面積約二十二万余平方キロメートルの地域内に定住する韓民族によって記述され、今日伝承されている文学には、一体いかなる形式と内容が盛られており、それを他の国民文学、特に歴史的に密接な関係にあった、中国文学と比較考究してみた場合、いかなる特質特色が認められうるであろうか。

朝鮮民族は、その有史の幕開けと共に、中国勢力の波及を来し、その文化、文明の影響を受けるに及び、それまでの固有の生活に、大きな変貌を来すようになった。このことは、その生活のなかに胚芽した文学的機能においても、例外ではなかったはずである。今、文学の有史以前の原始形態のことはしばらくおくとして、隣接の大国、中国の文化がこの半島に波及し、進展した消長を概観することは、この国の文化活動、とりわけ、文学の趣移の要因のなかの大なるものを、抽出、剔抉することにもなろう。

漢文化の伝来は、年代的には詳らかではないが、歴史上、漢族を始めとする北方異民族との軋轢、争奪が始まったのは、紀元前二世紀ごろ、燕人衛満が千余人の党を集め、出塞して涇水を渡り、秦の故空地であった上下鄣の間に侵入し、国境を守備するという約束のもとに、朝鮮王、準を懐柔し、その地方を封授した時から、積極性を帯びて活発になって来た。その後、漢武帝が衛氏朝鮮を滅ぼし、その勢力圏内に、真番・臨屯・楽浪（以上、元封三年、一〇八B・C）・玄菟（元封四年、一〇七B・C）の四郡を設置するに及んで、奢侈をきわめた漢人の生活様式が、土着朝鮮人に大きな影響を与えただろうと思われることは、近年になって楽浪古墳から発掘出土した、多くの生活道具の、眩いばかりの工芸品の精巧さ、特に、絶妙な金銀耳杯漆杯、彩絵漆筐、彩文漆匣などからして、想像に余りあり、また漢書地理志に、「其田民飲食目饌豆 都邑頗放効 吏及内郡賈人 往往目杯器食」とあり、漢人の生活を模倣し、奢侈化し

ていった一端を、うかがい知ることが出来る。

やがて三国が鼎立すると、高句麗は北方大陸に雄拠し、その文化は、始めは魏・漢・兩晋の影響を受け、後には南北朝の影響を受けたのであるが、學術、宗教、芸術面においては、とりわけ北朝からの影響が大きく、楽浪文化のようになり、漢文化の正流を汲むのとは違い、北方文化の亜流の範囲内にあり、特に、仏教が小獸林王の時（三七二A・D）伝来されたと言う事実は、土着民の思想を、多彩且つ豊富なものにした。高句麗の、北方民族としてのその文化性が、粗剛、野趣に流れる嫌は免れえないにしても、一方潑刺さと生氣にみちたものがあり、時には北魏芸術を凌駕する雄渾ささえも見られた。

百濟は、建国当初から帶方に接し、いち早く漢の文化を取り入れ、また南支那と海路往来が頻繁であったので、その文化はかなり高度に発達していて、隣の新羅、駕洛国に比べて、はるかに優位に位置していた。

一方新羅は、地理的關係から、外国文化の移入面においては、もっともたち遅れをとったと言う不利があった。しかし反面、徐々に入ってきた文化は、高句麗と百濟で一応同化作用をへた、摂取にたやすいように変改、純化されたものであったが故に刺戟性が弱く、固有文化が移入文化のために一朝にして駆逐されることがなく、両者の調和、吟味、消化が順調に行われ、結果的には、三国のなかでもっとも穩健、着実な文化の進展を可能にしたのである。新羅は、儒教よりも仏教による支配統治に終始した国家であった。仏教の東漸と新羅の王權とは、不可分の因果關係にあったし、新羅文学の根柢も、実にここにあるのである。

そもそも、三国における仏教の東漸は、始め王家、貴族の間にまず浸透し、仏法は王法として王權確立、國家擁護の宗教として受け入れられ、庶民の濟度、安心の確立のためには用をなさなかった。庶民には安易な土着の信仰を信奉せしめ、仏教の如き崇高な觀念に参与せしめる必要性を認めなかった。

最初、南韓諸国は、名目上の總王を推戴していたものの、實力は各部落國家にあったので、國家有事の際には、皆